**東北大学病院出張診療所における**

**診療用放射線の安全利用のための指針**

|  |
| --- |
| **第1.0版** |

2020年3月30日

**東北大学病院出張診療所**

**東北大学病院出張診療所における診療用放射線の安全利用のための指針**

目　次

1. 目的
2. 診療用放射線の安全管理に関する基本的考え方
3. 放射線診療に従事する者に対する診療用放射線の利用に係る安全な管理のための研修に関する基本方針
4. 診療用放射線の安全利用を目的とした改善のための方策に関する基本方針
5. 放射線の過剰被ばくその他放射線診療に関する有害事象等の事例発生時の対応に関する基本方針
6. 医療従事者と放射線診療を受ける者との間の情報の共有に関する基本方針
7. その他の留意事項等について
8. **目的**

診療用放射線を安全かつ安心して使用するためには、診療用放射線について正しく理解し、適切に管理することが重要であり、2019年の医療法施行規則の一部改正において、医療機関の管理者が診療用放射線に係る安全管理の体制を整備することが求められることとなった。具体的には、医療放射線安全管理責任者の配置、診療用放射線の安全管理のための指針の策定、放射線従事者等に対する診療用放射線に係る安全管理のための職員研修の実施、さらに、診療用放射線による医療被ばくに係る安全管理のために必要となる業務の実施及び方策として、医療被ばくの線量管理、医療被ばくの線量記録の実施である。

本指針は、医療法施行規則(昭和23年厚生省令第50号)1条の11第2項第3号の2イ、国際放射線防護委員会（International Commission on Radiological Protection。）Publication 103 「国際放射線防護委員会の2007年勧告」(以下「2007年勧告」という。)、Publication 105 「医療における放射線防護」及び国際原子力機関(International Atomic Energy Agency。以下「IAEA」という。)の議論に基づき、東北大学病院出張診療所(以下「診療所」という。)における診療用放射線の安全利用のための指針として取りまとめるものである。

1. **診療用放射線の安全管理に関する基本的考え方**
   1. 2007年勧告並びにIAEAの議論に基づき、放射線防護の基本原則を次に示す。
      1. 正当化

* 医学における放射線利用は、放射線診療を受ける者に害よりも便益を多く与える場合に許容される。（第1レベル）
* 特定の症状を示す放射線診療を受ける者に対する放射線医学的手法の適用が、診断あるいは治療において、有益性が有害性を上回るか判断する。（第2レベル）
* 個々の放射線診療を受ける者に対する放射線医学的手法の適用において、有益性が有害性を上回るか判断する。（第3レベル）
* 医学的手法の正当化とは、放射線診療を受ける者のベネフィットが常にリスクを上回ることを考慮して、適正な手法を選択する。
* 医療関係者と放射線診療を受ける者の双方が放射線のリスクを正しく認識し、放射線診療を受ける者の自発的同意の下で当該医療行為を実施する。
* 検査の適切性を保証する。
* 正当化が適切に実施されているか点検及び評価を実施する。
  + 1. 防護の最適化
* 放射線診療による医療被ばくは、放射線の安全管理に関する基本的考え方を踏まえ、診断参考レベルに基づく線量設定等により、合理的に達成可能な限り低くすべきであること（as low as reasonably achievable：ＡＬＡＲＡの原則）を考慮しつつ、適切な放射線診療を行うに十分となる最適な線量を選択する。
* 被ばく線量を適正に管理する。
  + 1. 線量限度の適用
* 医療被ばくにおいては、放射線診療を受ける者の被ばくは意図的であり、医学的必要性から線量が設定されるべきであり、線量限度を設定することは便益より害の方が多いため、線量限度は定めない。
* 「線量限度の適用」を行わない代わりに、「正当化」及び「防護の最適化」を適切に担保することが重要である。

## 2007年勧告に基づき、放射線被ばくを受ける対象者を次の3つに分類する。

### 医療被ばく

以下の3つに分類される

#### 放射線診断、放射線治療等の医学的理由により放射線診療を受ける者が受ける被ばくであり、妊娠あるいは授乳中の放射線診療を受ける者の医療被ばくに伴う胎児又は乳児の被ばくを含む

#### ①の放射線診療を受ける者の家族、親しい友人等が、診療所、家庭等における当該放射線診療を受ける者の支援、介助等を行うに際して受ける了解済みの被ばく

#### 生物医学的研究等における志願者の被ばく

### 職業被ばく

放射線作業従事者等が自らの職業における仕事の結果受ける全ての被ばく

### 公衆被ばく

職業被ばく、医療被ばく及び通常の局地的な自然バックグラウンド放射線による被ばくのいずれをも除いた、放射線源から公衆が受ける被ばく

## 2007年勧告に基づき、人が放射線被ばくを受ける状況を次の3つに分類する。

* + 1. 計画被ばく状況

エックス線装置の使用、診療用放射性同位元素の使用等、放射線源の計画的な導入及び使用に伴うものであり、被ばくの大きさと範囲を合理的に予測でき、被ばくが生じる前に放射線防護を前もって計画することができる状況。

すべての医療被ばくはここに含まれる。

* + 1. 緊急被ばく状況

放射線源の計画的な使用中において、悪意ある行動を含む何らかの不測の事態が発生したことにより、急を要する防護対策と長期的な防護対策を実施することを要求される可能性がある状況

* + 1. 現存被ばく状況

自然放射線に起因する被ばく、緊急被ばく状況の後の長期的な被ばく等、管理に関する決定をしなければならない時点で既に被ばくしている状況

## 放射線被ばくによる健康影響は次の２つに大別される

* + 1. 組織反応（確定的影響）

しきい線量と線量の増加に伴う反応の重篤度によって特徴付けられる、細胞の傷害。被ばくした線量がしきい値を超えると、発生するおそれが高くなり、線量が高くなると重篤度が増す。

* + 1. 確率的影響

発生のしきい値がなく、線量の増加に伴って直線的に発生率が増加するような放射線による影響。悪性疾患及び遺伝的影響が挙げられる。

# **放射線診療に従事する者に対する診療用放射線の利用に係る安全な管理のための研修に関する基本方針**

医療放射線安全管理責任者は、診療用放射線安全管理体制を確保するための研修（以下「医療放射線研修」という。）を行わなくてはならない。

## 医療放射線研修対象者

### 医療放射線研修の対象は次に掲げるものとする。

### 医療放射線安全管理責任者（医療法施行規則第1条の11第2項第3号の2柱書きに規定する責任者）

### 診療所医師

### 診療放射線技師

### 放射性医薬品を取り扱う薬剤師

### 放射線診療を受ける者への説明等を実施する看護師等

## 診療所内の医療放射線研修対象者については年度ごと名簿を作成する事。

## 医療放射線研修項目

研修の内容は次の表に掲げるものとする。

* + 1. 医療被ばくの基本的な考え方に関する事項

医療被ばくの基本的な考え方に関する研修は、放射線に関する基本的知識、放射線の生物学的影響に関する基本的知識、組織反応（確定的影響）のリスク、確率的影響のリスク等を習得する。

* + 1. 放射線診療の正当化に関する事項

放射線診療の正当化に関する研修は、診療用放射線の安全管理に関する基本的考え方を踏まえ、放射線診療のベネフィット及びリスクを考慮してその実施の是非を判断するプロセスを習得する。

* + 1. 医療被ばくの防護の最適化に関する事項

医療被ばくの防護の最適化に関する研修は、診療用放射線の安全管理に関する基本的考え方を踏まえ、放射線診療による医療被ばくは合理的に達成可能な限り低くすべきであること（as low as reasonably achievable：ALARAの原則）を考慮しつつ、適切な放射線診療を行うに十分となるような最適な線量を選択するプロセスを習得する。

* + 1. 放射線の過剰被ばくその他の放射線診療に関する事例発生時の対応等に関する事項

放射線の過剰被ばくその他の放射線診療に関する事例発生時の対応等に関する研修は、被ばく線量に応じて放射線障害が生じるおそれがあることを考慮し、放射線障害が生じたおそれのある事例と実際の放射線被ばくとの関連性の評価や、放射線障害が生じた場合の対応等を習得する。

* + 1. 放射線診療を受ける者への情報提供に関する事項

放射線診療を受ける者への情報提供に関する研修は、検査・治療の必要性、当該検査・治療により想定される被ばく線量及びその影響、医療被ばく低減の取組の内容等の説明に関する内容を習得する。

## 医療放射線研修方法

本研修は、東北大学病院が開催する「診療用放射線の安全利用のための研修」または必要に応じて臨時に開催された研修を受講することにより行う。また、当該病院等以外の場所における医療放射線研修、関係学会等が主催する医療放射線研修を受講した場合は、当該研修の受講をもって診療所の研修の受講に代えることができる。この場合においては、当該研修を受講した者は、当該研修の開催場所、開催日時、受講者氏名、研修項目等が記載された受講を証明する書類を医療放射線安全管理責任者に提出すること。医療放射線安全管理責任者は、研修に参加できなかったものに対する対応を講じる。

## 医療放射線研修頻度

医療放射線安全管理責任者は、対象者に医療放射線研修を１年度１回以上受講させなければならない。さらに、必要に応じて定期的な開催とは別に臨時に開催する。

## 医療放射線研修の記録

医療放射線安全管理責任者は、研修を実施したときは、開催日時または期間、受講者氏名、研修項目を記録し保存する。

# **診療用放射線の安全利用を目的とした改善のための方策に関する基本方針**

医療放射線安全管理責任者は、放射線診療を受ける者の被ばく線量に対して医療目的や画質等とのバランスを考慮した上で、関係学会の策定したガイドライン等を参考に、対象となる放射線診療機器等の線量を評価し最適化の検討を行う（線量管理）及び放射線診療を受ける者に対する放射線診療機器等の線量を適正に管理するために放射線診療を受ける者の被ばく線量等を記録する（線量記録）。

## 線量管理及び線量記録の対象となる放射線診療機器等

### Ｘ線ＣＴ組合せ型ポジトロンＣＴ装置

### 陽電子断層撮影診療用放射性同位元素

## 線量管理及び線量記録を行う診療

　管理・記録対象医療機器等を用いた放射線診療に当たっては、被ばく線量を適正に管理及び記録しなくてはならない。

線量管理及び線量記録を行う医療機器等、それぞれについて線量管理及び線量記録の方法を明示した一覧を別紙作成する。当該医療機器を用いた診療のうちの一部を線量記録対象とする場合は対象となる診療を記載する。管理・記録対象医療機器等であって線量表示機能がないために線量記録を行わない医療機器については、その旨とともに一覧に記載する。

## 線量管理

医療放射線安全管理責任者は、医療被ばく研究情報ネットワーク（Japan Network for Research and Information on Medical Exposures: J-RIME）が策定した診断参考レベル（以下J-RIME DRLs）および学術資料等を活用して線量を評価し、診療目的や画質等に関しても十分に考慮した上で、最適化を定期的に行う。

なお、診断参考レベルとの比較が出来ない場合には、その理由及び当該装置等における線量管理に係る対応を一覧に記載すること。最適化を実施する場合には、診療目的や画質等に関して十分に考慮する。線量管理は、検査種別に行うこと。

線量管理について、次に記すような場合および必要に応じて見直しを行う。

### J-RIME DRLs等に変更があったとき

### 放射線診療機器等の新規導入または更新があったとき

### 撮影条件、検査方法、プロトコール、手技等に変更があったとき

医療放射線安全管理責任者は、線量管理を実施したときは、日付、方法、最適化の内容、結果、実施者等を記録する。

## 線量記録

医療放射線安全管理責任者は、放射線診療を受けた者の被ばく線量を、当該放射線診療を受けた者が特定できる形で診療録及び照射録を用いて記録する。

線量記録には、放射線診療を受けた者及び撮像日時を記載した上でJ-RIME DRLs等を参考に、当該放射線診療を受けた者の被ばく線量を適正に検証できる様式とする。線量記録は、再撮影の管理も含む。

医療放射線安全管理責任者は、線量記録を5年間保存する。

## 他診療用放射線に関する情報等の収集と報告

医療放射線安全管理責任者は、行政機関、学術誌等から診療用放射線に関する情報を広く収集するとともに、得られた情報のうち必要なものは、放射線診療に従事する者に周知徹底を図り、必要に応じて病院長への報告等を行うこと。

# **放射線の過剰被ばくその他の放射線診療に関する有害事例等の事例発生時の対応に関する基本方針**

## 報告体制

### 診療用放射線の被ばくに関連して放射線診療を受ける者に何らかの不利益（有害事象）が発生した場合又は発生が疑われる場合は、これを認識した従事者は当該診療の依頼医及び医療放射線安全管理責任者にその旨を報告する。ただし、被検者に不利益が発生しなかった場合については当該診療の依頼医への報告は要しない。

## 医療放射線安全管理責任者への報告は所定の書式をもって行うこと。ただし、緊急を要する場合には速やかに口頭で報告し、その後に遅滞なく所定の書式で報告する。当該診療の依頼医への報告は口頭でもよい。口頭での報告を行った場合、その旨を放射線診療の記録や診療録等に記載すること。

## 報告には次に掲げる事項を含むこと。

### 事例の概要（発生日時、内容、関与した従事者、影響度）

### 事例の要因

### 再発防止のための対策

## 報告を受けた医療放射線安全管理責任者は、定期的及び必要時に診療所安全管理責任者に報告すること。診療所安全管理責任者はすみやかに診療所長に報告すること。

## 有害事例等と医療被ばくの関連性の検証

診療用放射線によると疑われる有害事象の報告を受けた主治医及び医療放射線安全管理責任者は、放射線診療を受ける者の症状、被ばくの状況、推定被ばく線量等を踏まえ、当該診療を受ける者の有害事例等が医療被ばくに起因するかどうかを判断する。

医療放射線安全管理責任者は、次に掲げる内容について必要に応じて当該放射線診療に携わった主治医、診療所医師、診療放射線技師等と共に検証する。

* 医療被ばくの正当化（リスク・ベネフィットを考慮して必要な検査であったか）及び最適化（ＡＬＡＲＡの原則に基づき、必要最小限の被ばく線量となるよう努めたか）が適切に実施されたかどうか
* 組織反応（確定的影響）が生じるしきい値を超えて放射線を照射していた場合は、放射線診療を受ける者の救命等のやむを得ない必要性によるものであったか
  1. 改善・再発防止のための方策の実施

医療放射線安全管理責任者は、検証を踏まえ、診療所医療安全管理責任者と協働して、速やかに放射線診療を受けた者等に説明を行うなど対応を行うと共に同様の医療被ばくによる事例が生じないよう、改善・再発防止のための方策を立案し実施する。

1. **医療従事者と放射線診療を受ける者との間の情報の共有に関する基本方針**
   1. 放射線診療を受ける者に対する説明の対応者

放射線診療を受ける者に対する説明行為は、当該診療を受ける者に対する診療の実施を指示した主治医または主治の歯科医師が責任を持って実施する。

診療所に所属する医師、診療放射線技師及び看護師（医療放射線研修を受講した者に限る）は、被検者に対する説明を補助することができる。ただし、当該放射線診療の正当化に関する事項の説明は依頼医が行うこと。

* 1. 放射線診療を受ける者に対する診療実施前の説明方針

放射線診療を受ける者に対する診療実施前の説明は、放射線診療を受ける者にとって分かりやすい説明となるよう、平易な言葉を使った資料を準備するなど工夫しつつ次に掲げる点に留意して行う。

* 当該検査・治療により想定される被ばく線量とその影響（組織反応（確定的影響）及び確率的影響）
* リスク・ベネフィットを考慮した検査・治療の必要性（正当化に関する事項）放射線診療が病気の発見・治療に必要不可欠であることの説明
* 診療所で実施している医療被ばくの低減に関する取り組み（最適化に関する事項）
* 「正当化」「最適化」を実践していることの説明

診療所での放射線診療について、放射線診療実施前の説明と同意に関する事項を診療録等に記録する。

* 1. 放射線診療を受ける者から診療実施後に説明を求められた場合などの対応方針

放射線診療を受ける者から放射線診療実施後に説明を求められた場合及び有害事例等が確認できた際の説明は、次に掲げる点に留意して行う。

* 1)「放射線診療を受ける者に対する説明の対応者」及び2)「放射線診療を受ける者に対する診療実施前の説明方針」に沿って対応する。
  1. 指針の閲覧

本指針の内容について放射線診療を受ける者及びその家族等から閲覧の求めがあった場合は、医療放射線安全管理責任者は診療所安全管理責任者と協議の上、必要と認めた時はこれに応じるものとする。

1. **その他の留意事項等**
   1. 紹介被検者の放射線診療

放射線診療を目的として外部病院等から紹介された被検者について、放射線診療の実施前に正当化及び最適化を行い、前項「2) 放射線診療を受ける者に対する診療実施前の説明方針」に則った説明が検査依頼医より被検者になされていることを確認すること。

* 1. 指針の見直し

医療放射線安全管理責任者はJ-RIME DRLs等の変更時、放射線診療機器等の新規導入又は更新時など必要に応じて、本指針の改正の要否及び改正内容に関する審議を診療所安全管理専門委員会にて行い、本指針の改定等を決定する。

2020年3月30日

東北大学病院出張診療所

医療放射線安全管理責任者　四月朔日　聖一

診療所安全管理責任者 田代　学

診療所長 高瀬　圭

本規定は、2020年4月1日から施行する。

修正

修正